

# 笹の葉は み山もさやに さやげども

## あれは妹思ふ 別れ来ぬれば

柿本人麻呂(巻二・一三三)

持統天皇のころを中  
心に活躍したとみられ  
る歌人、柿本人麻呂が  
妻との別れの際に詠ん  
だ歌です。一度、声に  
出して読んでみてくだ  
さい。「さ」の音の繰  
り返しが印象的です  
ね。

一番歌)に付随する反  
歌の二首目にあたりま  
す。詳細は不明ですが、  
柿本人麻呂は何らかの  
任で石見(現在の島根  
県西部)に赴任し、現  
地で妻を得たものの都  
である大和に戻らねば  
ならなくなった、とい  
う状況が考えられま  
す。

長歌では、親しんだ  
妻を置いて里を離れ山

やまと  
万葉がたり

も越えてしまったこと  
を歌い、「妹が門見む  
靡けこの山」と歌い  
おさめます。「妹」と  
はここでは妻のこと  
で、妻の家の門を見る  
ために越えて来た山が  
平らになってほしい、  
と歌います。無茶な願  
いではありますが、山  
に靡くように命じる強  
い歌いぶりが胸に迫り  
ます。反歌の一首目で

は、高角山の木々の間  
から私の振っている袖  
を妻は見ただろうか、  
と、やはり山越しの妻  
を思っています。  
そして反歌の二首目  
が今回の歌です。三句  
目の漢字本文には「乱  
友」とだけあります。

「さやげども」以外に  
もさまざまな訓みが行  
われていますが、例え  
ば古事記中巻・神武天  
皇条に見える反乱の予  
兆を告げる歌には一字  
一音で「木の葉さやぎ  
ぬ 風吹かむとす」と  
あり、「さやぐ」が「乱」  
研究員・阪口由佳)

《訳》笹の葉は山に満ちてざわざわと風に鳴って  
いるが、私の心は一途に妻を思う。別れて来たので。

に通じているとみられ  
ます。今回の歌も、不  
吉なほど山がざわめき  
笹の葉が乱れている  
中、自分は一心不乱に  
別れて来た妻のことを  
思っている、という様  
子が想像できます。

「石見相聞歌」と呼ば  
れるこの一連の作は、  
少し異なる形の歌が複  
数残されており、人麻  
呂が完成度を追及した  
ことがうかがえます。  
(県立万葉文化館主任

# 秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに

## 君に寄りな言痛くありとも

但馬皇女(巻二・二一四)

す。

但馬皇女は高市皇子が亡くなった後、単独で宮を構えていたようです。但馬皇女が和銅元年(七〇八)六月に薨去した後、穂積皇子は悲しんで歌を詠んでいます(巻二・二〇三番歌)。

二人の恋は語り継がれたようで、後の歌集にも断片的に伝わっています。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

いかに他人の言

青々としていた稲が黄色みを帯びてきて、収穫の時が近づいてい

像されます。「言が痛」いとは現在ではあまり用いない表現ですが、『万葉集』には人目・人言(噂)を気にして会えない、という歌も多

残されており、当時は噂を気にして恋愛を隠していたことがわかります。

さらに今回の歌は、題詞に「但馬皇女の

やまと 万葉がたり

市皇子の宮に在しし時に、穂積皇子を思ひて作りませる歌一首とあります。天武天皇の皇女・但馬皇女は、異母兄である高市皇子の妻の一人でありながら、別の異母きょうだいである穂積皇子に恋心を寄せていたと読み取れます。三句目「片寄りに」の「片」は漢字本文では「異所」と書か

れ、夫とは異なる方、すなわち穂積皇子に向かう状況に重ねたという説もあります。なお、当時、異母きょうだいの結婚や恋愛は問題とされませんでした。この次の歌(一一五番歌)の題詞には穂積皇子が近江の崇福寺に遣わされたことが記され、二人の間を遠ざけるための措置だったか

とすじにあなたに寄りた

葉がうるさくても。

いかに他人の言